

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ニコス・カザンザキス『ミハリス隊長』第一章（二）
Author(s)	其原, 哲也
Citation	プロピレア , 29 : 134 - 112
Issue Date	2023-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054853
Right	Copyright (c) 2023 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



ニコス・カザンザキス

『ミハリス隊長』第一章（二）

其原 哲也 訳

国際カザンザキス友の会日本支部会員

そして現在、ミハリス隊長は窓を開け、煙草を捨てた。煙草は赤い流星のように植木鉢の上に落ちて行き、まだ濡れたての肥しの上で消えた。

立ち上がった。ミハリスの顔は暗かったので、代官は震えあがった。彼も立ち上がった。

「ミハリス隊長よ、君が怒ったままで我が家の戸を出させたくない。忘れるなよ、われらは義兄弟であることを。われらの血は混ざり合ったのだ」と言

った。

「忘れていない。俺たち二人のうちの一人はいまだにこんな風に生きてるんだからな」

ミハリスの頭に、田舎家のオリブの木の皮下で過ごし、年代物のワインで歓談し、絹と亜麻布のシートで深く眠った夜のことが鮮明によみがえった……

瓶を取って、グラスを満たし、飲んだ。また満たして、また飲んだ。座った。

「あんたの家には小人はいないのか？ 人形影絵芝居はないのか？ そいつにとんぼ返りをさせて、タンバリンを鳴らさせて、アマネス」を歌わせる。さもないと怒るぞ」と言った。

ヌールは喜んだ。うまい具合に怒りは去った、ラキに酔酌して溺れるだろう、願ったりだ！

ヌールの心は、義兄弟のため、今夜前代未聞の大きなことをしたいと切望したが、この気難しい百戦錬磨の男を少し飼慣らし、少し喜ばそうという友情と愛が度外れだった。知恵を絞り、家をひっくり返して、義兄弟に贈るものを捜して引っぱり出した。長持の中の昔の宝石類、壁際に置いた銀メ

ツキの二輪馬車、羅紗と絹織物、満杯の食糧庫、どれをあげたらいいだろうか？　そして突然頭に柳かごのことが閃いて、最も高価な宝石を見つけてほほ笑んだ。ヌールは客人の方に振り返った。

「今夜、君への厚意で、義兄弟よ、トルコ人がその兄弟のためにさえ決してしないことをしよう」と言った。

ミハリス隊長は振り返って彼を見つめたが言葉が発しなかった。グラスにラキを注ぎ直した。

ヌールは立ち上がって、女部屋につながる低い扉に近づいた。

「マリア！」と大声で呼んだ。

階段を滑り落ちながら、黒人の老女が姿を現した。干し葡萄のように皺が寄り、歯が欠け、イナゴマメのように痩せていて、金の十字架のネックレスを下げていた。

「奥さまにブズーキをもってお越しになるよう言え」

びっくりして、びくびくして、黒人女は目やにのついた眼を挙げて、彼をじっと見た。

「行け！」彼女を怒鳴りつけて追い払った。

ミハリス隊長はグラスを離した。もう口をつけていたのだが、ヌールの方を振り返った。

「これはどういうことだ？」怒りを込めて言った。

「君への厚意だ、義兄弟よ、まあ任せてくれたまえ」
「何が厚意だ。あんたの男らしさへの面汚し、あんたの奥さんへ外国人の男の面前に出ろという恥辱、俺に目をあげて彼女を見るといふ恥をさらせというのか」

ヌールは言葉に詰まった。

「まあ任せてくれたまえ」もう一度言った。

もう気が変わっていて、自分の申し出を後悔して恥じていた。

立ち上がり、羽毛のクッションをひとつ隅の小長椅子の上に置き、もう一つを壁際に奥さまが柔らかく座れるように置いた。ミハリス隊長が立ち上がり、ランプを下すと、柔らかな薄明かりが部屋にこぼれた。ミハリスはベルトから黒い珊瑚でできた小さな数珠を取り出し、地面を見つめながら苛々と数え始めた。

女性の話し声が部屋の上から聞こえた。急いで床を踏みしめて扉を開け閉めする音がして、蛇口

は滴って水が流れ、そのあと静かになった。しばらく時間がたった。

ミハリス隊長は目をあげた。『雌犬は来ないだろう。粗暴だし、チェルケス女だ、拒むだろう。その方が善い。何千倍も善い。どんな悪魔が俺をひっ捕まえて動けなくしているというのか？ 立ち去ろう！』と考えた。

しかし立ち上がった瞬間、階段が軋んだ。一段一段、踏み台がうなつた。鎖とプレスレットのチリンチリンという朗らかな音が聞こえた。ヌール・ベイは低い扉にとびついて開け、掌を胸と唇、額にあて、挨拶をした。

「よく来たエミネ・ハヌーム、楽に座って……」と丁寧に言った。

扉の敷居の薄暗がりの所で、満月のようなヌールに似た形の丸顔の、着痩せした、ふくよかで、大きな切れ長の目の、頬と唇、眉、睫毛に化粧をして、爪と手のひらにキニーネ^二を塗って、懐に小さなピカピカのブズーキ^三を赤ん坊のように抱えた若い娘が、輝きを放っていた。

赤いサンダルを履いた上品で小さな足を延ばし、

首筋を張って、窓辺に男の影を見ておびえて大声でキャツと言ってみせた。

「恥ずかしがるな、わが妻よ」そう言ってヌールは女の脇の下を取った。「この男はわが義兄弟だ、一度もお前に良い噂をしていたミハリス隊長だ。われらは二人とも今宵心が重い。さあ、ブズーキを弾いてわれらにお前の故郷の歌を一曲歌ってわれらを喜ばし、気持ちいを軽くさせてくれ。そういうわけで、妻よ、お前が下に降りてくるよう頼んだのだ」

ミハリス隊長は目を地面にくぎ付けにしていたが、それを聞いた。掌の中で数珠を丸めていたが、握りつぶしてしまった。沢山このチェルケス女の美しさについての、凶暴さについての、歌についての噂は聞いていたが、この女の歌は毎回、祝日の真夜中に、目の詰まった格子窓を通して震え、地区を揺るがし、トルコ人と基督教徒の職人肌の男たちは物陰に、路地の隅に集まり、聞き惚れるのであった。彼ら全員は子牛のように溜息をつき、ヌールは彼らを格子窓から高く分け隔て、エミネの胸を掌でつかんであたかも世界をつかんだかの如く誇らしく思うのだった。

ミハリス隊長は人妻が動く後ろから増してゆく重い匂いを感じたが、女は代官が設えていた隅の方に近づいて行った。ミハリスの前を通って、両目をぎらつかせて、彼を見つめた。同じ稲妻がミハリス隊長の両眼にも走った。そしてすぐに分かれた。二人とも怒り狂っていた。

令夫人は羽毛のクッションの上に腰を落ち着けて、足を組んだ。

「なんて暗いの！」と嬌声をあげて言った。

女は男たちに見られたがっていた。

ヌール・ベイは立ち上がって、ランプの灯芯を持ち上げた。光が部屋にまんべんなく広がり、チェルケス女のキニーネを塗った頬と手、弓なりに反った足の裏をびかびか光らせた。

ミハリス隊長は目を上げて貪るように女を見つめた。しかしすぐに目を伏せた。そして数珠の二個の母珠は、掌の中で粉々に砕けた。

「こんばんは、ミハリス隊長」トルコ女は鼻の穴をもてあそびながら言った。

声が男の喉からかすれて出てきた。

「こんばんは、エミネ・ハヌム。こんなんであ失礼

だが。」

人妻は笑った。遙か彼女の故郷では、女は顔をべールで被わず、馬にはまたがって乗り、男とともに戦場で戦った。そこでは男は女を満足させ、女は男を満足させた。しかし幼い頃より取り置かれ、彼女の父親は彼女を帝都の年老いたパシヤに売り、その後このクレタ島の代官がやって来て彼女を誘拐し、エミネは男たちと交際する時間もないままに男くさい口臭を満足させた。そして今彼女は男と対面するたびに、飢えた獣のごとく鼻の穴をもてあそんでいた。日がな一日足を組んで格子窓の後ろに座って、通り過ぎていくくそがきどもを眺め、基督教徒の男たちの替わりにトルコ人の男たちを眺めていると、胸が痛んだものだった。そして散歩に出たときには、純絹製のべールをびっちり纏い、乳母でもあった年老いた黒人女について行って、男でいっぱいのカフェを通り過ぎ、あるいは凶々しい人足や水主のいる船着き場を下りて行き、あるいは散髪も入浴もしていない汗臭い田舎者たちとともに城門をまたぎ越すのを好んだ——そしてチェルケス女はその華奢な鼻の穴を開け閉めして、

空気を吸い込み、男の臭さを満喫するのだった。

「神様に誓って、ねえ、マリア、もし臭くなかったら、あいつらを見に歩き回ることもしないのね！」ある日振り返って年老いた乳母に言った。

「誰をでございますか、お嬢さま？」

「男どもをよ。あんたはどううまくやったのよ、若い時？」

「わたくしは基督様を信仰してましたよ、お嬢さま」そう年老いた黒人女は言うのと、ため息をついた。

今夜エミネの鼻の穴はもぞもぞ動いて、ミハリス隊長の方に向き直っていた。

彼を見つめながら黙っていた。何回となく代官は自慢げに、今彼女の目の前にいるこの男のことを話していたのだ！それはもうこの男の勇敢さや酒好き、凶暴さ、猥談をするのも聞くのも好まないことについて聞いてきたのだった！そして今、ほら男が、彼女の目の前に、ほかならぬ彼女の夫が彼女のもとへ男を連れてきて、鼻の穴は飽くことなく揺れ、二人の間の空気を吸って戦っていた。

「エミネよ、妻よ、チェルケスの歌を一曲わしらの

ために歌って、わしを喜ばしてくれ、世の憂さを忘れられるように。二人の男がここにおる。わしらを隣れんでくれ」と、ヌール・ベイは言った。

奥さまは鶉のようにくっくつ鳴いた。膝の上のブズーキに触れ、天然の石筆を弾いて、首を持ち上げた。

「妻よ、何を歌ってくれるのかな？」と、嬉しげに代官が尋ねた。

「私の心の赴くままに」と女は答えた。

ブズーキがよみがえり、薄明りの中で獣のように躍動し、空気を混ぜ合わせた。そして出し抜けに傾げた首から出た女の声が、大地の腸より噴水を震わした。家は動き、沈んで、ミハリス隊長のこめかみは軋んだ。これは何という戦か、なんとという突撃か、彼の喉の、腎臓の中で掬い取ったなんという喜びか！山々は低くなり、平原はトルコ軍の部隊で赤くなり、ミハリス隊長は彼らの向こうのヌールの牡馬に跳びかかっけいき、彼の後ろには数千のクレタ軍が黒い頭巾を被って付き従い、誰も彼の前には出ないのだった。村々は悲鳴を上げ、焼け落ちて、それはあたかも糸杉が切り出されるよう

であり、また尖塔が倒れて、彼の馬の膝と腹まで血が昇って来たのだった。あたりを見渡すと、そこはここレタではなかった。そこはこの大城塞の城壁ではなく、海でも家々でもなかった。このモスクではなかった。ヌールの牡馬で騎乗して、アヤ・ソフィアに入っていたのだ！馬から降りて、十字を切って、頭を天空につるされた丸天井の上で高く上げてから、おもむろにクレタの戦士たちの墓から鐘が引つ張りあがり、鐘楼に吊るされて、聖ミナス教会の老番人であるムルジュフロス、しかめつ面の男というあだ名のただの老人だが四十七尋はある、が、鐘を鳴らし、響かせ、轟かせもして、ミハリス隊長も死者たちとともに鐘のように踊ったのだった。

ミハリス隊長は手のひらで自分のこめかみをつかんだ。すると突然世界は再び立ち上がり、クレタ島とメガロ・カストロと代官所と代官がまた現れた。代官はエミネを見つめ、ため息をつき、一杯飲んでいた……精神をわしづかみにされ、自分の牢屋に入り直した——チエルケス女の喉は沈黙していた。

しばらくの間誰もしゃべらなかつた。しまいにエミネが動いて、膝の上のブズーキを撫でた。「古いチエルケスの歌でした。男たちは馬に乗って戦に赴くときにこれを歌うのです」と言った。

ヌールは立ち上がった。軽く膝をよろめかせ、妻に近づき、その豊満な体を抱き上げた。

「エミネよ、汝に乾杯、三つの物事を、わしはムアツジンから聞いたことがある、ムハンマド——神の栄光彼にあらんことを！——が愛していた三つの物事を。香りと女たちと歌だ。エミネよ、お前はその三つとも持っている。千年間達者でな、千年も二千年も！」と言った。

ただの息でグラスを飲み干し、舌を鳴らした。ミハリス隊長の方に向き直った。

「飲め、義兄弟よ、君に代わって、エミネに乾杯しておこう！」そう言つてミハリスのグラスを満たした。

しかしミハリス隊長は二本の指をなみなみと注がれたグラスに差し入れ、力いっぱい穴を開けると、グラスは軋んで、真つ二つに割れ、ラキがテーブルの上にごぼれた。

「十分だ！」と息を詰めてうなると目を曇らせた。エミネは絶句した。長椅子の上に立ち上がったまま両目を真ん丸にして、ミハリス隊長を見つめた。女は人間の手からそんな力が出るところを見たことがなかった。夫の方を挑戦的に振り返った。「ヌール・ベイ、あんた出来る？ 出来る？ 出来る？」と息を切らして尋ねた。

ヌールは青ざめた。右掌に全神経を集中させて、手を伸ばし、もう一つのグラスに二本の指を差し入れて割ろうと試みたが、冷たい汗が流れただけで、怖気づいた。妻に恥ずかしくて、凶暴な暗いまなざしをミハリス隊長に投げ掛けた——『わしをまた物笑いの種にした、わしの妻の前で、もう我慢ならん！』

エミネの腕を強引に掴み、怒り狂って女を激しくゆすぶった。

「二階にあがってろ！」と女に命じた。

「出来る？」と女はたたみ掛けて、頬を紅潮させた。

「出来る？ 出来る？」

「二階に退がってろ！」と代官は命じ直すと、ブズーキを奪って壁に投げつけて粉々にした。

チエルケス女は軽蔑を込めて嘲笑した。

「これがあんたに出来ることよ。ブズーキを壊すってこと。これがあんたに出来ることでしょ。ねえヌール！」

長椅子を滑り降りて、ミハリス隊長の傍擦れ擦れを通して、女の衣は彼の手の甲に触れた。また空気に麝香が沈殿した。ミハリス隊長は手が熱くなるのを感じた。

笑顔で、大騒ぎしながら、ヌールの周りを一巡り、二巡り執拗に回って、からかうように彼に視線を投げて笑いながら、すぐに階段の方に向かって行き、女は姿を消した。

二人の男は部屋の本真ん中にお互い向かい合っているが、胸が不安そうに上下していた。ミハリス隊長は唇を噛み、動かず、暗澹たる面持ちで、彼を見つめていた。そして二人とも掌をベルトから跳び出したナイフの柄に触れていた。

「とうとうヌールがとげとげしい口調で話し始めた。」

「ミハリス隊長よ、帰ってくれ！」と小声でささや

いた。

「ヌール・ベイよ、自分が帰りたいときに、帰らせてもらう。グラスも丈夫なやつを取って、注いでくれ」と返事した。

代官はナイフの柄をぎゅっと握り、ランプに向かって瞬きした。跳びかかってランプを消し、暗闇にとどまって戦うという考えが浮かんだ——あとは死神の為すがまま。彼の心はどつちつかずの閃きで揺れた。

「丈夫なグラスを取って、俺に注げ。でない、俺は帰らない」ミハリス隊長は静かに繰り返して言った。

ヌールはテーブルの方を振り返って、足を開いた。足は鉛のように重く、苦勞してテーブルまでたどり着いた。大びんを横にしてグラスになみなみと注いだ、手が震えて、ラキが残りの鶉の上にごぼれてしまった。

「飲め」と言つて、ミハリスにグラスを示した。

「手でわたせ」ミハリス隊長が答えた。

代官は呻いた。グラスを取って、ミハリス隊長の掌の中に押し込んだ。

するとミハリスは不機嫌なまま、満ちたグラスを掲げた。

「ヌール・ベイよ、汝に乾杯。あんたに善いことをしよう。兄貴にトルコを侮辱しないよう頼むつもりだ」と言つた。

そう言つて、舐めて唇を濡らし、黒いマントを頭に縛り付けて敷居をまたぎ越した。

灯台は今真つ暗闇の庭園に緑と赤の帯状の光を投げかけて、ミハリス隊長は静かに、ゆつくりと後ろを振り返ることなしに、門の方へと引き揚げていった。

もうだいぶ暗くなっていた。メガロ・カストロはもう夕食を摂り、眠気を催し、寒くなり、一枚一枚窓を閉め、十字を切り、眠る準備をしていた。ごくわずかの夜遊びの連中はまだ小路を巡り、ごくわずかの片思いの若者は閉まった窓の下へ足を巡らせ、時折明かりの灯った賤の屋からは静かなおしやべりが聞こえてきた。晚餐会をしていたのだ。

フカロブリ姉妹が扉の後ろで直立して待ちくたびれて、凍えていた。ミハリス隊長が飛び出してくるのが遅かったのだ。闇をも押し詰めて、口数少なく常に元氣のない彼女たちの兄がやって来たので、テーブルクロスを敷いて教語の言葉を交わした——明日は何を料理しどのくらいの石炭も、油も、石油もアリストテリス氏が用意するのももう要らないか。女たちは話し、テーブルクロスを敷いたり外したり、消化を助けるために夜食用のカモミールを準備したり、足首までの長さのある寝間着を着て、十字を切った——しかし女たちの思慮と關心は緑の扉のもとにあった。

ミハリス隊長は自分の家に帰るのに最も遠い道のりを探った。今夜は彼の心臓が体の内で膨れ、弾

けて四囲の城壁に入れておくことができないと感じた。彼の体にも、彼の家にも。突然メガロ・カストロは幅が狭くなり、彼は入らなくなっていた。道路も、家々も、小路も、人々も、彼には息苦しかった。歩みを進めつつ歯を食いしばった。誰かに追われているような気がしていた。ストラータ広場に入ったが、閑散としていた。ごくわずかな灯油の信号が石畳の地面の上に赤っぽいランプの光線を投げかけていた。バザールを通り過ぎたが、一軒のトルコ人用の大衆食堂、一軒のカフェと二、三軒のタヴェルナはまだ開いていた。誰かが彼を呼んだ。ポリクシギス隊長のように聞こえたが、歩みを速めて逃れた。パシヤの門の外側からライオン像のある大理石製のヴェネツィア時代の噴水まで到達した。目を上げると、呪われた大鈴懸の木が目に入ったので、近づいて、誰も通り過ぎなかったので十字を切った。

「神があなた方の骨を浄めますように、おやじ達よ、さようなら！」とつぶやいた。

幾世代にもわたって、この茂った鈴懸の木で、パシヤは反抗してきた基督者たちを絞首刑に処して

きた。そして常に、一年中用意されたわっかの綱がその一番太い枝に吊り下がったままになっていた。「しかし基督者の同胞を、ある晩俺はたたき起して、斧でお前を切り倒してやる、畜生め！」そうつぶやくと怒りを込めて、古い鈴懸の木を、まるでそれがトルコ人でもあるかのように見つめた。

また歩き始めた。細長く真つ暗な小路に入つて、トリス・カマーレスに出た。人っ子一人いなかった。シャツのボタンを外した。息苦しかったのだ。深呼吸して、辺りを見つめた。遙か北の彼方には、海がびかびか光つて唸つて、頭を廻らすと、青黒い山々、ユフタス山、セレナ山、プシロリテイス山地が空に描かれて、そのうえ天空たかくには星々が燃えていた。上り下りし、急ぎ、馬のように喘ぎながら、歩みを進めた。城塞を巡る空堀のところまでたどり着いた。向かい側、離れた陵堡のところに小さな平屋の家屋が認められた。ハンセン病隔離所のメスキニアだった。より低い方、海の上には、もう一つの陵堡、『七本の斧』があった。今から二百年以上前、そこからトルコ軍が襲い掛かつて来てメガロ・カストロを蹂躪し、そしていまだに七本の斧は

地面に突き刺さったままになっていた。内海の向こうには、亀のように淡く軽くデイーア島という無人島が合図していた。

後ろから女性の話し声と絹のか細くさらさらいう音が聞こえた。トルコ人の老人が現れたが、背を丸めて大きな火の灯つた提灯を抱えていた。老人の後ろから黒いベールをつけた二人の貴婦人が附いてきたが、傘を広げ、くすくす笑いながらおしゃべりに興じていた。夜に麝香が漂っていた。

ミハリス隊長は驚いて飛び上がった。「悪魔つて奴はみんな後ろから俺を襲いやがる」そうつぶやくと彼方、海の方を眺めるのに戻ったが、貴婦人たちを見ないようにした。悪魔つて奴はみんな、だが奴らをやり過ごすことはできないだろう。

今やミハリスは大急ぎで家に帰り始めた。しかし誰にも会いたくなかった。彼の足音、咳を聞きつけ、家族は理解し、身をかがめるだろう。部屋のアの一つを開け、彼は一人きりになるだろう。妻も、子供たちも、犬も連れずに、ただ一人きりに！
そしてその時、決断をするだろう。

ミハリスの妻カテリーナと娘リニオが、ランプの下にうつむいて座って待っていた。彼女たちの後ろには、中庭の窓の近くの壁一面を占める細長いソファアの端に、ミハリス隊長がいつも座り、ほかの誰も座らない席があった。彼がいない時でさえ、大きな重い陰がそこに居座り、妻も娘もあえて近寄ろうとしなかった。彼の体に触れたかのように考え、震えながら後ずさりした。

母親は靴下を編み、ランプの光は栗色のきつく編んだ髪とアーチ形の眉、色つやのいい頬に落ちて、悲しげな口と幅広いきつぱりとした顎の半面まで照らしていた。この人は奇妙な優しい女性であった――優しく強く頑固な。若い時分、志操堅固な美少女であり、生粋の隊長の娘であった。彼女の父親、トラシヴロス・ルーヴァス隊長は男子に恵まれず、その娘カテリーナは男性的な雰囲気と息子としての薰陶を受けて育った。しかし彼女は結婚して、獅子の手の中に落ちた。始めのうちは踏ん張って抵抗した。しかし徐々に屈服していった。誰がミハリス隊長と争うことができようか？ 彼女の力と強気さは萎えていき、穏やかになっていった。

編んで、編んで、考え込んでいた。彼女の全生涯はこれの前で過ぎ、流れて、去っていった、水のよう……時折、両目を挙げて見つめた。四囲の壁高く、黒く太い額縁に入れられて一列に並べられたのは、すべて、どう猛な野獣でアイロンゴてで固めた髭の一八二一年の英雄たちであり、その真ん中、一人の闘士の前に、小さな銀製の燭台が灯っていた……

キラ・カテリーナは無言のまま首を振った。彼女の一生は、父親の家でも、夫の家でも、戦火の中で過ぎていった。まだ結婚してない一八六六年の蜂起の時、彼女も葉きよう入れベルトを身に帯び、ライフルをとって、トルコ人が村に踏み込まないように戦った。まだ娘っ子だったが、もう一つの革命では、修道士が修道院から持ってきた古いノートブックを切り裂いて、他の娘っ子たちとともに葉きようを巻いた。キラ・カテリーナは火薬の匂いに非常に詳しい知識がありそれが好きだった。ミハリス隊長は夫として非常にふさわしく彼女は好きだった。しかし一人の女としてこんな生活は重苦しく、時々ひそかに不満に襲われた。

靴下を編むのを止めてまた目を挙げ、見つめた。ソファアの上に、一枚の古い石版画がかかっていた。『ペリシテ人によって引きずられ罵倒されるサムソン』。真ん中に不恭順な若者が手足を綱と皮ひもと鎖で縛られて、彼の前後には逆上した巨軀怪力の男たちが彼を押ししたり引いたりして、ほかの連中は棒でつついたり笑ったりして、塔の上高く鉄格子製の小窓からは狡知に長け、胸をはだけた女、デリラが姿を見せ、くすくす笑っているのが見えた。

キラ・カテリーナは、すべてこれらを初めて見るかのように家をぐるりと一回りして、ため息をついた。そして再び靴下の方に身をかがめ、沈黙した。彼女の娘は十五歳くらいのぼちやりとはしているが締まるところはしまった娘で、父親似の濃く繋がった両眉と母親似の幅広くきっぱりとした顎をしていたが、編んでいたレースから目を挙げた。彼女の足に巻き付いて横たわっていた細くしなやかな雑種の雄猫を撫でた。

「なんでため息をついているの、お母さん。何を考えているの？」母親に尋ねた。

「私が考えられることと言ったらねえ」と母親は返事した。「自分の人生のことよ。そしてあんたの。かわいそうに、野獣の手の中に落ちちゃって。洗礼を受けてない子のことも考えてたの、眠るように、泣かないようにまた寝かしつけたけど、お父さんがまた悪魔に憑かれるかもしれないものね。でもトラサキだけは大丈夫かもね。お父さんに似てるから」

目を天井の方に向けて、じっと耳を傾けた。

「眠ったわ。もう静かになつたわ。幸せな子ね」と言った。

そしてすぐに言った。

「あの子は父親に生き写しね。見たでしよう、どんな風に怒るか。どんな風に眉を顰めるか。どんな風に友だちをぶつか。どんな風にはしたなく女を見つめるかを」

リニオは黙った。父親を恐れていたが、愛してもいたし、誇りにも思っていた。彼のすることは何でも正しいと彼女には思えた。そして彼女ももし自分が男だったら同じようにしただろう。彼女も息子だけが見たかったし、友達には、父親が扉を開け

て家に入ってくるのが聞こえるまで、中に隠れさせたのだった。十二歳になり胸が膨らみ始めた日から、父親は彼女が自分の前に姿を見せることを禁じた。三年間父親と話さなければならぬ時は、父が家にいる限りはいつも台所か二階の子供部屋に隠れていた。娘は遠くからでも彼の足音を聞きつけるとまっすぐ隠れたものだったし、猫も聞きつけると、リニオの目の前にいるやつでも尻尾を巻いて逃走した。それも当然で、父親が正しいのだった。理由はリニオにはうまく説明できなかったが、父親が正しいことは確かだった。

母親も同様に感じていたが、それを口に出しては言わなかった。同じように彼女もしただろうし、夫のすることは全て、彼女の父親もしただろう。彼女の父親、老ルーヴァス隊長が彼女の面倒を見るのにどれくらいかかっただろうか？もう二十歳ぐらいだっただろうが、まだ結婚していない時だった、ある晩、家で、老隊長を兵士たちが包囲したのは。殺せるだけ殺したが、衆寡敵せず、捕まり、兵士たちは、彼を中庭に下ろしてメガロ・カストロのパシヤのもとに連れていくことで一致

した。そしてその時カテリーナの母親と彼女が前に出て彼と会った。殴られ切られして、頭から血を流していた。手を挙げて彼女たちを呼んだ。『達者でな。あまっこよ、心配するな！達者でな。わたしにはコリヴァ+を定期的に供えてくれ。自由のために死ぬのだ。泣かないでくれ！カテリーナよ、お前に喜びのあらんことを！』で、男の子を生んでトラスと名付けるように、わしのようにな！』

彼はメガロ・カストロに連れていかれ、パシヤの扉の外側、大鈴懸メカノの木の下に座らされた。トルコ人の床屋が来て彼の皮を剥いだ。その皮から冷酷な役人ムスタファ・パシヤは刻み煙草入れを作った。これらすべてが今宵キラ・カテリーナの頭を過り、靴下を編んで嘆息したのである。ミハリス隊長とはよく過ごしたし、不満はなかった、豪傑だったし、誠実だったし、尊敬されていたし、二言はない男だった。外国人の女を見つめたりしなかったし、カードで遊ばなかったし、ケチではなかった。年に二度だけ気晴らしのために酔い、男だもの、構やしないわ、ほかの男たちは泥酔したが、彼はほろ酔い程度だった。しかしある年、生活はにわかにならなく

なつた、去年娘が生まれたのだが、その時、ミハリス隊長はその赤ん坊を認知しようとしなかった。『俺はこれを見たくない、これが泣くのを聞きたくない！』彼女を毎朝怒鳴り、ドアを開けて店へと去ってしまった。『どこの馬の骨が黒い目にしやがったんだ？』

彼の血統からは誰も黒い目をしたものが出なかった。だがこの赤ん坊の目は黒かった。いったい誰の仕業か？ 彼の家に忌まわしい出来事が起こったかのごとく、彼の血が穢されてしまったかのごとく、ミハリス隊長はこれを受け入れることができなかつた。

可哀そうな母親は涙を呑んで沈黙した。いったい何が言えただろうか？ じつとこらえて、家の大きなイコン台の神使ミハイルが黄金の翼をして炎のような嵐を起こす剣を携え、その手に怯えてむつきにくるまれた赤ん坊のような見習い信者の魂を保持した姿のイコンの前に身を投げ出した。身を投げ出して懇願した……彼はうちの守護天使ではなかつたか？——うちの夫に話しかけてください、ある晩彼の夢に降り立って彼を叱り、彼

の心を少し和らげてください……と。

終日店に逃れていたので、見習い小僧のハリトスに弁当を持たせて送り、母親は解放された赤ん坊を叫ぶがまま、泣くがままにし、膝であやした。しかし日が暮れると、これに眠り薬を与え、翌朝まで寝直さなくていいようにした。

二階から夢を見て叫んでいるトラサキの音が聞こえた。母親は微笑んだ。

「あの幸せな子は眠っていても静かにできないのね」と言った。全てを夢見ているのだ、狩りをし、殴り、軍勢を率い、トルコ人を殺すことを……ああクレタの苦悩は終わることがない……

彼女たちは沈黙していた。リニオは窓から夜を見つめた。まだ北風が吹いていて、窓枠が軋んでいた。どこか遠くの家から若い母親が息子をあやしているのが聞こえた。リニオは目を閉じて、耳を傾けた。すると胸がむずがゆくなつた。

「お父さん、今夜は遅いわね、今夜は……」すぐに、気分転換するために言った。

母は言った。「お父さんに知らせていたでしょ、ヌールは。トルコの犬野郎は何をさせたいんでし

ようね？」

リニオは笑った。

「お父さんがまたあいつの赤いベルトをつかんで屋上に投げ飛ばしちまうわ！」誇らしげに言った。

母親はかぶりを振った。

「でも後でヌールは十人の基督者を逮捕するでしょうよ、恨みを晴らすために。終わらないのよ、ねえ、きりが無いの、クレタ島の「ごたごたは」

「お父さんが生きている限り、怖くなんかないわ！」

「同じことを私も私のお父さんについて言ったものだけ。でもある夜……」

母は黙った。クンバールロス、例の洗礼を受けた猫がリニオの足の上に急に立ち上がって、耳を玄関の方に振り向けた。二人の女も耳を敬たがてた。リニオは慌てて縫い糸と刺繍と鉄てつを片付け、猫はすでに台所の中に姿を消した。

「来る……」娘が言った。

この時扉の外に乾いた咳の音が聞こえた。

「ほら！」

母親が立ち上がった。

「食事を温めに行くわね」と言った。彼は入って誰にも会いたくない、だから咳をしたのだ。

扉が激しく揺れて、開いた。ミハリス隊長は敷居をまたぎ越し、鉄砲を置いて中庭を通り、家の中に入って見つめた。誰もいなかった。頭巾を落として短外套チョッキを脱いだ。汗でずぶ濡れだった。自分の定位置に座ったが、それはソファアの角、中庭の小さな果樹園に面した窓の隣にあった。ベルトからマントを外し、額の、首の、胸の汗をぬぐった。窓を開けて空気を取り入れた。

二人の女が台所で火をつけ、食べ物を温めているのが聞こえていた。赤ん坊が金切り声を挙げたように思えた瞬間にだけ、即座に彼の血が騒いだ。聞き耳を立てた。じつと耳を傾けた。静かだった。煙草入れを取り出し、一本つまんだ。ライターを取り出し、火をつけた。だが彼の口に苦味がし、毒だと感じたので、煙草を窓から捨てた。

妻が食事の皿を持って現れた。皿をテーブルの上に置いた。ミハリス隊長は頭を挙げないで言った。

「腹減ってない、皿を下げる！」

妻は話さなかった。皿を取り下げると姿を消した。

重たい沈黙が家の空気を押しつぶした。ミハリス隊長は立ち上がり、短外套を再び着て、黒いマントの二つの縁を首に結んで、扉の方へ向かった。己が見解を再検討し、少し立ち止まった。素早く視線を自分の周りに投げかけた。一八二一年の闘士たちが壁一面に仄光っていた。武器と葉きょう入れベルトとピストルを帯び、口髭は綱のようにひねってあり、髪の毛は肩に落ちていた……

しばらくの間、ミハリス隊長は時を忘れた。彼らを見つめ、彼ら一人一人にあいさつをした。いきさつは詳しくは知らなかった。どこで戦ったのか、どんな英雄的行為をしたのか、彼らのベレー帽はどこ由来なのか——本土人、ペロポネソス人、島人、クレタ人。しかし、気に病んでもいなかった。ただ一つのことを把握していた、彼らすべてがトルコと戦ったということ、そしてそれだけで十分だった。その他のことすべては教師たちに任せればよかった。

一人の闘士の前に、燭台が灯っていて、あたかも

聖人のイコンのようであった。誰かが部屋に入ってきて彼に理由を尋ねたものだった。

「聖なるカライスコス殿だ」素っ気なく答えて会話を止めたものだった。

この人は彼の祖父、魁傑ミハリスの隊長だった人だ。ギリシア人がアテネの近くのフアリロに陣を張っていた時のある夜、トルコ野郎どもの天幕が対峙していたが、祖父は酩酊していた。司令官は翌朝他の隊長たちが到着するまで誰も自分の陵堡を動いてはならないという命令を出していた。基督教徒側は少なく、お察しのように、トルコ軍は数千の大軍だった。しかし祖父はほかのクレタ人たちとともに酩酊していた——誰が彼らを屈服させることができたのだろうか？ 自分たちの陵堡から出撃し、トルコ軍の天幕に切り込んでいき、銃の乱射を始めた……基督教徒もトルコ人も捕まり、カライスカキス⁺は天寿を全うすることなく殺された。

「彼は寝首を搔かれたんだ、寝首を搔かれたんだ……構やしない。俺の爺さんだって殺されたんだ。全員殺されたさ」とミハリス隊長はつぶやいた。

中庭に出た。井戸があり、葡萄棚が上にあり、井戸の隣に水桶があり、その周りに植木鉢が置いてあり、彼には狭苦しかった。中庭の隣に、小さな馬小屋があつた。白い雌馬が、薄明りに光っていた。その両耳を揺り動かすと、振り返つて自分のご主人様を見て、嬉しそうに嘶いた。ミハリス隊長は近づいた。幅広い、決然とした掌で、その首、腹、腰を撫でた……陰部は熱く、愛らしく、命令されればどこにでも行けるようにいつでも待機していた。誇り高くて従順だつた。常に彼を助け、彼とともに行動し、彼の体のように動き、死ぬまで付き従つた。長時間掌をたっぷり分厚い灰色のたてがみの中に浸っていたが、動物の熱い体温が深く彼の体の中に入ってくるのを感じ、彼自身の熱い体温と混ざり合い、男と馬は一つになつた。突如、たてがみが彼の短いうなじに生え、力が増して自分の家の壁やメガロ・カストロの城壁を跳ね飛ばせるようになり、嘶きながら、トルコに征服された肥沃な平原をヌール・ベイの田舎家の方に向かってなだれ込んでいくことができるようになったと感じた。力が、土からそして馬の熱い体から立ち上り、彼

の足の裏をつかんで、膝を、脇腹を、腎臓を登攀し、膨張し、胸を破砕した。土と動物からくる凶暴な力だつた。

跳躍して、敷居をまたぎ越した。

「ハリトス！」と大声で呼んだ。

妻が現れた。

「今は眠つてます」と言つた。

「起こせ！」

煙草を一本つまみ、シヤキツと背を伸ばして待たつた。吸つた。もう口に毒だとは感じなかつた。煙が鼻の穴から密になつて出てくるのを見ながら、静かに待たつた。

ハリトスが現れたが、寝ぼけ眼で目をこすつていた。髪は乱れていて、身なりは整つてなくて、裸足だつた。十二歳ぐらいの野生の雌山羊のようだつた。ミハリスの甥、つまり羊飼いの兄のファヌーリオスの息子だつた。父親の村から来たのは、父がいわゆる学問をさせようと計画したからだつた。しかしミハリス隊長は学問が大嫌いだつた。『きざ野郎に、お前をするのか？ 教師つてやつに？ お前の叔父の教師ティティロスがどんなさまかを

見てないのか？ あいつがどんな風に青二才どもに馬鹿にされたか。目が悪くなるぞ、ざまあない、眼鏡をかけるぞ、馬鹿にされるぞ。俺の店に座れ、で、大きくなって頭が固まったら、俺が元手を出してやる、お前自身の店を出して、一人前になれるようにな」同じことをフアヌーリオスにも言った。

『あいつをお前の好きなように育ててくれ。お前の肉はわしの骨。あいつを殴ってくれ、一人前になるように！』と兄は答えた。

ミハリス隊長はハリトスの首筋をぎゅつと掴んで、揺す振って、目を覚ませせようとした。

「水飲み場に行つて、顔を洗つて、目を覚ませ。したら俺が注文するから来い」と言った。

ハリトスは中庭に出て、井戸から水を引いて、顔を洗い、爪でほつれた髪の毛を梳いた。叔父さんのところに戻った。

「起きました」と言った。

ミハリス隊長は肩をつかんで命令した。

「行つて来い、お得意様の五軒の家に、で、扉を叩け。石を掴んで、開くまで叩け。分かったか？」

「分かりました」

「ヴェンドウゾス家、フロガトス家、カヤンピス家、ベルトドウロス家の扉に、それとエフエンディナのいる回教修道院にな」

「エフエンディナ・カヴァリーナ^{十二}さんっすか？」

「エフエンディナ・カヴァリーナだ。そして、彼らにこう言え。『わが叔父、ミハリス隊長からよろしくとのことです。それで、明日は土曜日です。ええと、日曜日、朝早く、どうかお越しく下さい』ってな。分かったか？」

「分かりました」

「行け！」

妻を大声で呼んだ。

「めんどりを三羽絞めて、つまみを用意して、パン粉をこねろ。地下室を整理して、ソファート、腰掛けと、グラスを出せ」

妻は話そうとした、夫に『四旬節ですよ、神様を恐れないのですか？』と言おうとしたのだ。しかし夫は手を挙げた。妻は黙った。中に入つてため息をついた。

「またお祭りをやるぞ、俺の運命なんて呪われちまえ」流しのところに直立して皿を洗っていたり

ニオに言った。「鶏を絞めるぞ。三羽な。地下室を整理するぞ」

階段が軋むのを聞いた。ミハリス隊長は二階に上って眠った。

「何も死んでないでしょ。六か月はまだ経ってないのに」リニオは装ったが、彼女の内で心は喜びに羽ばたいていた。

彼女は家をごちゃごちゃするのが好きだった、おつまみが行ったり来たりし、男たちが家の土間に座って酒を飲んだりするのが。

「あの人の心は思ったより早く息を吹き返したのね。また内なる悪魔が目覚めたのね」母親はつぶやいた。

彼女は十字を切った。

「お慈悲を、神よ、呪います、もう我慢できません！ あの人は今大齋も踏みに行っています。もう神様さえ恐れていません！」と言った。

彼女の怒りの矛先は、神棚の上の神使ミハイル

に向かった。『私がどれだけ改悛したと、どれだけ懇願したと思っているの？ どんな油を注いで、どんな蠟燭をお供えしたと！ 無駄ね。天使様もあの人と一緒になってしまったのね！』と考えた。

「ああ、でも私も男だったら、誓って言いますが、私も同じことをしましたでしょう！ 私も五つ六つ馬鹿なことをして、気が大きくなつたときは地下室に降りて、みんなと酔っぱらって、歌を歌って、リラを弾いて、踊ったでしょうよーそして景気をつけたでしょう。男ならそうでしょう」とつぶやいた。

（本稿には現代の観点から観て一部不適切な表現が含まれていますが、原文の雰囲気や尊重するためあえて残したところもあります。文責は全て訳者にあることを明言しておきます。）

注

- 一 アナトリア（現トルコ）地方の民謡。「アマン」という合いの手を含み、特殊な発声技術を要する。
- 二 キナの皮から精製するマラリアの特効薬。
- 三 ギリシアの弦楽器。マンドリンに似た形。
- 四 天然の細長い石を撥（ピック）代わりに選って用いたと思われる。
- 五 クレタ島イラクリオ旧市街にある教会。クレタ島で最大規模の大聖堂がある。聖ミナスはアレクサンドリアの聖メナスとも呼ばれるギリシア・コプト正教の聖人で殉教者（二八五年―三〇九年）。
- 六 東ローマ帝国アングロス朝の第四代皇帝アレクシオス五世ドゥーカスの渾名。第四回十字軍の攻撃を防ぎきれず帝国を滅亡に晒した（一二〇四年―二月）。
- 七 一オルギアは両手を広げたときの長さ。水深を表すのに用いる。約一・八三メートル。
- 八 イスラム教の祭司。モスクのミナレットから信者に礼拝を呼び掛ける。

九 イラクリオの目抜き通りのひとつ、八月二十五日通りのこと。

十 ギリシア正教圏のお葬式で出されるお斎。穀類、ドライフルーツ、ハーブ、砂糖などを混ぜ合わせた妻ごはんのようなもの。

十一 Γεφύριος Καρπιακήκης ゲオルギオス・カライスカキスまたはカライスコス。オスマン帝国支配下のギリシア人軍人。始め山賊（クレフティス）、後自警団（アルマトロス）として活動し、ギリシア革命勃発とともにギリシア軍に参加し、勇名をはせたがファアリロで戦死した。（一七八二年―一八二七年四月二三日）

十二 カヴァリーナはギリシア語で「馬の糞」の意味。

参考文献リスト

本稿を書き上げるうえで参考にした文献の数はあまりにも多いのでそのすべてを挙げることはできないが、せめて手持ちのギリシア語文献とギリシア関連文献中の重要なもの、辞書類だけでも挙げておきたい。

まず『ツハリス隊長』本文のテキストだが、訳者の手元には都合三種類ある。すなわち、

- (1) NIKOY KAZANTZAKH : KAPETAN MIXANHS
(Ελευθερία ή Θάνατος) : ΕΚΔΟΣΕΙΣ
KAZANTZAKH : ΑΘΗΝΑ, 2010
 - (2) NIKOY KAZANTZAKH : KAPETAN MIXANHS
(Ελευθερία και Θάνατος) : ΕΚΔΟΣΕΙΣ
KAZANTZAKH : ΑΘΗΝΑ, 2017
 - (3) NIKOY KAZANTZAKH : KAPETAN MIXANHS
(Ελευθερία ή Θάνατος) : ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΕΘΝΟΣ
Α.Ε. : ΑΘΗΝΑ, 2013 ΤΟΜΟΣ Α' - Β'
- このうち(1)はカザンザキス出版から二〇一〇年に発行された旧アクセント法を使用した字体で印刷された全集の内の一冊である(以後旧全集版と呼ぶ)。また(2)は同社から二〇一七年に発行された新アクセント法、いわゆるモノトニコを使用した字体で印刷された全集の内の一冊である(以後新全集版と呼ぶ)。(3)はカザンザキス生誕百三十年を記念して発行された内容的には校訂前の旧全集版に基づきながら、字体はモノトニコを使用したエスノス社製の上下二巻本である。

各版の内容的な差異が気になるところだが、今回は詳細には立ち入らない。ただ第一章と第二章を見た限りでの次の事実を指摘するにとどめたい。

- ・(1)と(2)の一番大きな差異は副題である。(1)の旧全集版が『自由か死か』と訳せるのに対して、(2)の新全集版は『自由と死』と訳すのが適当かもしれない。

- ・(1)と(2)に内容的な差異はまだそれほど見分けられない。ただ、段落分けの仕方と数が微妙に異なっているだけである。

- ・(3)は(1)の旧全集版に依りながら、段落分けの仕方がかなり異なり数が減っている。表記記号にも若干の違いがある。また、副題は変わっていないようだが、旧全集版の「自由」を意味するやや俗語的な「ελευθερία」が正書法の「ελευθερία」に変更されている。

本稿は基本的に最新の研究を踏まえた(2)の新全集版に依拠しながら、ギリシア語の息吹とニュアンスをもっともよく伝えてるように思える(1)の旧全集版を適宜参考にした。

ギリシア関連文献

- 『ギリシア・トルコ・イスラエル』（世界の国シリーズ10）、池田裕、福田千津子、馬場恵二、木戸雅子、真下とも子、斎藤治子、白濱謙一、大村幸弘、高橋忠久、丹司正子、吉田大輔、山下守、服部寛之著、講談社、東京、一九八三年
- 『物語 近現代ギリシヤの歴史 独立戦争からユーロ危機まで』、村田奈々子著、中央公論新社、東京、二〇一二年
- 『近代ギリシア史』ニコス・スボロノス著、西村六郎訳、白水社、東京、一九八八年
- 『クレタ島』ジャン・テュラール著、幸田札雅訳、白水社、東京、二〇一六年
- Ο Καζαντζάκης ΜΕΣΑ ΑΠΟ ΤΙΣ ΣΥΝΑΟΙΤΕΣ ΤΟΥ ΜΟΥΣΣΕΙΟΥ, Δίτσα ΧΑΤΖΟΠΟΥΛΟΥ, ΜΟΥΣΣΕΙΟ ΝΙΚΟΥ ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗ, ΙΡΑΚΛΕΙΟ, 2019
- Ο ΝΙΚΟΣ ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗΣ ΔΕΥΜΒΙΒΑΣΤΟΣ ΒΙΟΓΡΑΦΙΑ ΒΑΣΙΣΜΕΝΗ ΣΕ ΑΝΕΚΔΟΤΑ ΓΡΑΜΜΑΤΑ ΚΑΙ ΚΕΙΜΕΝΑ ΤΟΥ Γ. ΕΚΑΘΣΗ, ΕΒΕΝΗ Ν ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗ, ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗ, 1975

辞書・辞典類

- 『現代ギリシア語辞典 第三版』川原拓雄著、リール出版、東京、二〇〇四年
- 『ギリシヤ語辞典』古川晴風編著、大学書林、東京、一九八九年
- 『ギリシア・ラテン引用語辞典 「新增補版」』田中秀央・落合太郎編著、岩波書店、東京、二〇〇七年
- 『トルコ語辞典 改訂増補版』竹内和夫著、大学書林、東京、二〇〇三年
- 『ブリーモ伊和辞典 和伊付』秋山余思著、白水社、東京、二〇一八年
- 『ボディートーク 世界の身ぶり辞典 新装版』デスモンド・モリス著、東山安子訳、三省堂、東京、二〇一六年
- Collins Greek-English Dictionary, first edition*
2003: Harper Collins Publishers, Glasgow 2003
- THE OXFORD Paperback GREEK DICTIONARY,*
Niki Watts, Oxford University Press Inc.,
New York 1997

ΛΕΞΙΚΟ ΤΗΣ ΝΕΑΣ ΕΛΛΗΝΙΚΗΣ ΓΛΩΣΣΑΣ, ΤΡΙΤΗ
ΕΚΔΟΣΗ, ΓΕΩΡΓΙΟΣ Δ. ΜΠΑΜΠΙΝΙΩΤΗΣ,
ΚΕΝΤΡΟ ΛΕΞΙΚΟΛΟΓΙΑΣ Ε.Π.Ε., ΑΘΗΝΑ
2008

ΕΤΥΜΟΛΟΓΙΚΟ ΛΕΞΙΚΟ ΤΗΣ ΝΕΑΣ ΕΛΛΗΝΙΚΗΣ
ΓΛΩΣΣΑΣ, ΔΕΥΤΕΡΗ ΕΚΔΟΣΗ, ΓΕΩΡΓΙΟΣ
Δ. ΜΠΑΜΠΙΝΙΩΤΗΣ, ΚΕΝΤΡΟ
ΛΕΞΙΚΟΛΟΓΙΑΣ Ε.Π.Ε., ΑΘΗΝΑ 2011
ΕΛΛΗΝΟ-ΙΑΠΩΝΙΚΟ&ΙΑΠΩΝΟ-ΕΛΛΗΝΙΚΟ
ΛΕΞΙΚΟ, ΤΕΤΑΡΤΗ ΑΝΑΘΕΩΡΗΜΕΝΗ
ΕΚΔΟΣΗ, ΒΑΣΙΛΗΣ ΚΟΡΑΚΙΑΝΙΤΗΣ,
ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΠΑΠΑΖΗΣΗ, ΑΘΗΝΑ 2016

Εικονογραφημένο ΑΓΓΛΟ-ελληνικό Λεξικό,

Τρισυγγενή Παραιώνυμου, ΕΚΔΟΣΕΙΣ
ΠΑΤΑΚΗ, Αθήνα 2017
Γλωσσάρι στο έργο ΤΟΥ ΝΙΚΟΥ ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗ,
Βασίλειος Α Γεώργας, ΠΑΝΕΠΙΣΤΗΜΙΑΚΕΣ
ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΚΡΗΤΗΣ, ΗΡΑΚΛΕΙΟ 2022

本稿を成す上で福田耕佑氏の懇切な指導と援助
が大きな役割を果たしたことを振り返り、ここに
深甚なる感謝の意を表します。また、温かく見守
って下さり、時には励ましの言葉や助言を下さる
師、友人の皆さまにも深く感謝いたします。そし
ていつもさりげなく見守ってくれる老父母にも有
り難うと言いたいです。